

教授・学習 640

新・旧情報を表す助詞「は」「が」の獲得

○ 田原俊司

伊藤武彦

(東京大学教育学部) (東北大学教育学部)

日本語における助詞「は」「が」の用法の区別は、日本人成人にとって容易にみえても、外国人日本語学習者にとって困難であることが広く知られており、また日本語学・言語学においても、しばしば論争がおこなわれているテーマである。構文論的にみると「は」は主題を表し「が」は主格を標示するという区別があるが、「は」と「が」の使用を文と文との関係、すなわち談話という観点からみると「は」の付いた名詞句は旧情報(場面あるいは先行文脈によって聞き手の意識にすでに導入されていると話し手に仮定されている情報)を表し、「が」の付いた名詞句は新情報(発話の時点で聞き手の意識に存在しないと話し手に仮定されている情報)を表す(C-hafe 1976)。このように「は」が旧情報を、「が」が新情報を標示することを日本語見はいつ頃より区別して使用するようになるのであろうか。

林部(1979, 1983) や近藤(1978)の研究によれば、「が」と「は」を新旧情報に基いて区別できるようになるのは言語発達のかなり遅い時期であり、中学生以降であることが明らかにされてきている。

本研究では近藤の用いた方法を参考にして、先行文脈との関係で「は」「が」を区別することが、いつ頃より可能となり、獲得されるのかを明らかにする。

[方法]

■被験者：東京近郊の保育園年中、年長の幼児、小学校1, 3, 5年の児童, 中学校1, 3年の生徒各10名, 成人20名, 計90名。男女半数。

■実験材料：図1 a①b②c③d④のように, a, bではそれぞれ異なる動物が個々に何らかの行為をし, cではa,

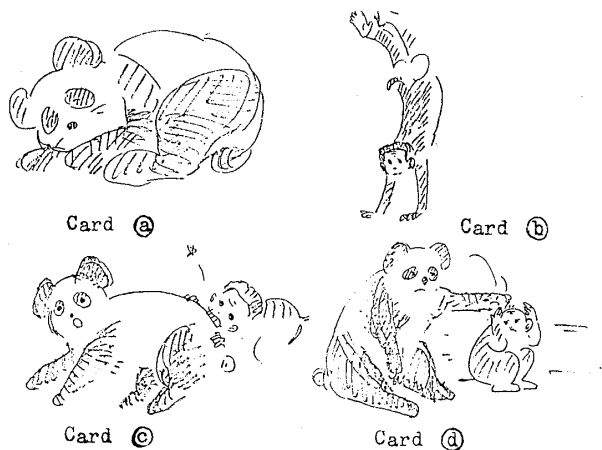


図1 本課題で使用された絵カードの1例

③のどちらか片方の動物が他方の動物に何らかの行為をし, ④では③で行為を受けた動物が何らかの行為をするというように設定された4枚1組の絵カードを1課題とし, 3課題。ぬいぐるみの人形。電話機2台。ついたて。電線。

■手続：図2に示す実験場面にもとづいて、実験者に、いまから4枚で1つになっている紙芝居を見せるので、ぬいぐるみの人形にその話を教えてあげて欲しいこと、ただし、ついたてを被験者とぬいぐるみの間に立ててしまい、ぬいぐるみの人形は絵を見ることができないので、電話で話をおしえてあげること、実験者が指さした被指示物について話を順番につくることを教示する。実験者が被指示物を指さして30秒以上しても物語をつくらない場合には「どうしているの」という発話を促す同いを与える。「一しているの」という返答のみで被指示物の欠如した文の場合には「ぬいぐるみの人形は絵が見えないので、人形にわかるように教えてあげて」という教示を与え、被指示物が表現されるまで繰り返す。実験者の被指示物の指さしの順番は、図1に示すa①b②c③d④の順に行い、a①b②ではそれぞれの動物を、c③では行為主の動物を、d④ではc③で行為を受けた動物を指さす。なお、b②に対する被験者の言及が終わり、実験者がc③の被指示物を指さす前に、「(c③の行為主)が、(c③で行為を受ける動物)を見つけました(括弧には動物名が実験では入る)」というナレーションを実験者は被験者に与える。1つの課題終了後、同様の手続で二課題を遂行する。

[結果と考察]

本研究の課題は、すでに記述したように一つの課題が4枚の絵カードから構成されているが、1, 2枚目の絵カード(それぞれa①b②のカード)は被指示物である動物が初出のもの、3, 4枚目(それぞれc③d④のカード)の絵カードは被指示物が既出のものとなっている。

図3は初出の被指示物を、図4は既出の被指示物を言及するときの助詞「は」「が」の使用率を示したもので

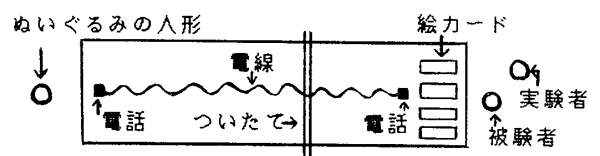


図2 実験場面

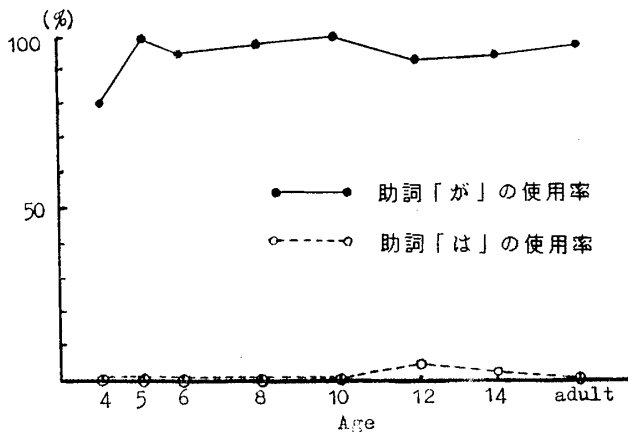


図3 1回目の言及に使用される助詞「は」「が」の使用率

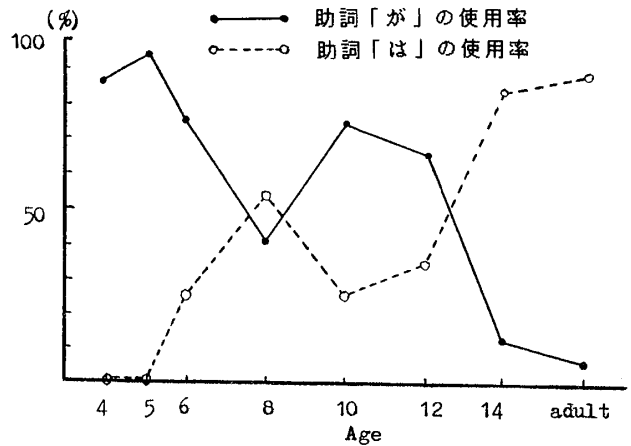


図4 2回目の言及に使用される助詞「は」「が」の使用率

ある。被指示物を言及する際、「は」「が」以外の助詞はほとんど用いられなかった。図3より、初出の被指示物を言及するのに使用される助詞は「が」であり、「は」はほとんど使用されないこと、これは年齢によりほとんど差がないことが明らかである。図4より、既出の被指示物を言及するのに使用される助詞は、年中・年長では「が」であり、「は」は用いられないこと、既出の被指示物を言及するのに「は」の使用がはじまるのは小学校1年からであり、小学校3年まで「は」の使用率は上昇すること、小学校5年、中学校1年で「は」の使用率に落ち込みが見られ、既出の被指示物を言及するために「は」を使用するのがほぼ完成するのは、中学校3年になってからであることがわかる。

林部、近藤は小学校高学年において、被指示物が既出であることを表示する「は」の使用率が低下することを指摘しているが、本研究はこれらの研究に矛盾しない。「は」の使用率低下の原因として、(1)本研究の手続上の問題、(2)被験者群の質の問題、(3)言語上(新・旧情報)の要因、(4)言語以外の心理的要因、を考察することができるが、林部、近藤の結果にも同様の現象が見られることから、(1)、(2)の原因は除外し

、(3)、(4)を追求していくのが妥当と思われる。この問題は、今後の課題である。

表1は、1~4枚目の絵カードの被指示物にそれぞれ言及して物語をつくる際、どのような助詞を用いたかを示したものである。もし、1枚目(㊸)、2枚目(㊹)の絵カードの被指示物を言及するのに「が」を、3枚目(㊺)、4枚目(㊻)を言及するのに「は」を使用したとすれば、「㊸㊹㊺㊻」の順番に「ががはは」のパターンとなる。表1の助詞使用のパターンをこのように理解すると、この表より、年中・年長では被指示物が初出、既出にかかわらず、ほぼ「がががが」パターンしか見られないこと、中学校3年以降では初出・既出を弁別し「ががはは」パターンを主に使用していること、小学校1~中学校1年では「がががが」パターンから「ががはは」パターンへの移行期として「がががは」パターンが見られるのに対して、「ががはが」パターンはほとんど見出しされないことがわかってくる。従って、被指示物が既出であることを示す「は」の使用は、ほぼ小学校1年ぐらいからはじまるのだが、この時期の子どもは言及すべき既出の被指示物が二つあるとき、既出の被指示物のうち最初に言及したものには「は」を用いることができず、既出であることをしめす「は」の使用は、既出の被指示物の片方の言及が終わってからであることが示唆される。

以上の本研究における知見をまとめると、就学前期の幼児は、初出、既出にかかわらず被指示物の言及に「が」を使用するのに対して、被指示物を言及する際、初出の被指示物に「が」を、既出の被指示物に「は」を使い分けはじめるのは小学校に入ってからであり、新情報(初出)・旧情報(既出)のマーカ―として「は」「が」を完全に使い分けようになるのは中学校後期になってからであることが明らかになった。

表1 課題における助詞の使用パターン

a b c d	4	5	6	8	10	12	14	成人/(age)
がががが (も)	18	27	17	7	19	14	2	0
がががは (も)	0	1	6	8	7	10	2	11
ががはが	0	0	1	2	0	1	0	0
ががはは (も)	0	0	4	10	4	4	25	48
その他	12	2	2	3	0	1	1	1